Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

理想の英語教育を求めて

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

昭和62（1987）年に開学した神田外語大学は初代学長として英語教育の大家である小川芳男氏を迎えました。小川学長は各方面から人材を集め、理想とする英語教育を実現する準備をしていきました。教授職の候補者に大学での指導経験のない人物がいました。佐々木輝雄氏です。佐々木氏は、小学校から高校で教員を経験するとともに、千葉県教育庁と文部省で英語教育の改革にあたってきました。神田外語大学の草創期を支えた人物の物語です。

昭和59（1984）年のことですが、私の名前が英字新聞の『ジャパンタイムズ』に載りました。当時、私は文部省で中学校と高校の英語教育の指導法についての改革を手がけていました。外国人による英語指導の先駆けとなる制度づくりに参加していたのですが、そのメンバーのひとりが『ジャパンタイムズ』に記事を寄稿し、私のことに触れたのです。

「佐々木は『ミスター・ドラスティック・チェンジ』と呼ばれることを好んだ。なぜなら、彼は日本の英語教育においてドラスティックな変化が必要であると信じているからだ」

読んで訳す勉強法が中心だった時代に、英語で授業を行うことや、コミュニケーションも含めた総合的な指導、そして背景としての国際理解や異文化理解が必要だと主張し続けました。よほど珍しかったのでしょう。だから、ミスター・ドラスティック・チェンジと言われた。私も、『英語教育のDrastic changeを求めて』なんて本を共著で出版したぐらいでしたからね。（※1）

私は、小学校、中学校、高校の教員、そして千葉県教育庁や文部省での仕事などかなり幅広い職場を経験してきたのですが、どちらかと言えば型にはまらないタイプだった。文部省でもずいぶんと上司とぶつかりましたよ。だからこそ、小川芳男先生と出会い、神田外語大学の設立に誘っていただいた。小川先生も、理想の英語教育の実現に夢を抱き、ドラスティックな教育改革を行おうとしていましたからね。私自身は、文部省を退職後に神田外語大学で教えられたことで、英語教育との関わりを継続することができました。

私の異文化理解の源泉は幼少期の体験にあります。戦前のアメリカに父が渡ったときから神田外語大学への道のりは始まるのです。（1/10）

1. 『英語教育のDrastic changeを求めて―高等学校外国語(英語)科指導事例集--教科書に則して-』【山口書店、昭和61（1986）年10月発行】

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

アメリカと日本の常識の違いを知らずに何度か死にかけたことがあります。

明治26（1893）年生まれの父は、宮城県の小午田農林学校を卒業後、北海道にあった東北大学農学部（※2）で花の栽培について学びました。研修修了後、20代前半でアメリカに渡り、ニューヨーク州で農場経営をしながら学んだことを実践していきました。母は広島の出身です。戦前は広島から海外へ渡る人は多かったようです。私は大正15（1926）年にニューヨーク州で生まれました。

昭和8（1933）年、日本に帰国しました。国際情勢の雲行きがあやしくなっており、このままでは強制収容所に入れられるかもしれないと父が判断したからです。氷川丸で2週間以上かけて太平洋を横断して帰ってきました。私が8歳のときのことです。帰国後は千葉県に農園を構えました。帰ってきても日本語が話せないし、書けないから家庭教師をつけて大特訓しました。

父は東北の宮城県の出身なので、帰省するときは列車で行きました。あるとき、列車の中の水道水を飲んでしまった。当時、列車の水は汚くて飲んではいけないのは常識でした。案の定、赤痢になった。医者に見放されるくらいひどかったけれど、好きなものを食べていいと言われ、チョコレートとバナナを食べたら治った。水を飲んでしまったのは、アメリカにいた時に、東海岸のニューヨーク州から西海岸のシアトルまで大陸を横断する寝台列車で行ったことがあり、その列車では水も飲めたからです。アメリカと日本の常識の違いを知らずに命を落としかけた。そんなことが何度かありましたよ。

私も自然と農学を志すようになっていきました。中学を卒業した後は、盛岡高等農林学校へ進学することに決めました。成績は充分でしたが、色弱のため身体検査で落ちてしまった。結局、浪人しました。昭和19（1944）年のことです。農学をあきらめた後は、一橋大学へ進学することに決めました。戦時中だから、南方で活躍しようと思ったのです。

英語の成績はよかったですね。中学、高校といつも先生に褒められてきた。だから、東京高等師範学校（※3）にも興味があった。一橋大学と受験日が重なり、結局、高等師範のほうを受けることにしました。

2. 現在の北海道大学農学部。
3. 後の東京教育大学、現在の筑波大学。

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

敵国語を学ぶことを責めた将校は言った。「これからはお前たちの時代だ」

浪人をしていたとき、私は国民学校（小学校）で代用教員として教えていました。卒業した中学校の校長に「佐々木、ぶらぶらしていると徴用されるぞ」と言われたのです。校長は役所にかけあってくれて、国民学校の教員の辞令を持ってきてくれた。教員が少ない時代だったから、雇ってもらえたのです。

東京高等師範学校には合格しました。英語を専攻する文科第3部です。代用教員の仕事が一段落した昭和20（1945）年7月に入学しました。すぐに学徒動員になって、杉並区の高円寺にあった陸軍気象部に配属されました。そこでは、気球を飛ばして、大気中の湿度や温度を計測して航空隊に報告したり、暗号の解読をしました。将校たちには「お前ら、敵国語など学んで恥ずかしくないのか！」と、ずいぶんいじめられました。

でも、その後すぐに敗戦です。暗号の解読をしていましたから、8月の10日頃にはポツダム宣言受諾が分かっていました。そして15日の玉音放送です。敗戦を知り、みな悔しがっていました。私たちをいじめた将校には、「これからはお前たちの時代だ」と言われました。複雑な気持ちでしたね。

終戦後、大学の授業が再開されましたが、校舎が焼けてしまったので、半年間は校舎での勉強、半年間は教育実習ということになりました。だから、私たちは大学時代に1年半も教育実習をしたのです。千葉の地元の中学校に行って実習をしていたのですが、校長先生が同じ村の出身の方で、私を非常勤講師として雇ってくれたのです。ですから大学の附属学校での教育実習は抜群の評価でしたよ。だって、お給料をもらいながら教えていたんですから。

大学卒業後は、まず中学校で教えました。1年すると、高校の英語教員が社会問題になるほど足らなくなり、高校の教員になりました。県立長生第二高等学校に赴任しました（※4）。教務部長や学年主任を経験して高い評価を得ましたが、年配の先生方からはいじめられた。それでも、この高校で教え続けるつもりだったのですが、校長に「君はこんな田舎の高校にいてはいけない」と、15年働いた高校を追い出された。大学の先輩が千葉東高校の校長をしており、誘っていただいたので、そちらに行くことになりました。（3/10）

4. 現在の千葉県立茂原高等学校。

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

「決まっているからダメ」と言われ、文部省でもずいぶんと反発しました。

千葉東高校で教えていた頃は1960年代の終わりで、学生運動が盛んだった時代です。この高校は千葉県で初めて学生たちによるバリケード封鎖が行われた学校でした。校内が占拠され、入り口は椅子や机が積み上げられている。屋上からは砂の入った牛乳瓶が投げつけられてくる。当然、千葉県の教育委員会からも職員が来て、対応にあたる。私は学年主任だったから現場での対応を彼らとともに行っていました。そんな縁もあって、千葉県庁のほうで英語の指導主事を探していて、私に声がかかった。県庁になんて行きたくなかった。自分は教えるのが好きだし、管理なんて大嫌いだから。

でも、実際に働き始めてみると、現場で英語を教える先生方に対して指導をするわけですから、やりがいがあるんですね。当時は、訳読式が主流でした。読んで訳す。これは変えなければいけない、と私は思いました。だから、千葉県の英語教員が集まる研修では、4技能を総合した英語指導法の重要性を説いていきました。「読む」「訳す」に加えて、「話す」「聞く」も入れた4技能です。コミュニケーションとしての英語を伸ばすことが重要だと思ったのです。アメリカでは、あまり読むことは勉強しましせん。それよりも、ディベートをして話す力、考える力、そしてコミュニケーションの力を高めていく。私自身も研修会や研究会では英語でスピーチをするようにしました。

千葉県庁には5年いました。その頃から高校の英語教員の海外研修なども始まって、本当にやりがいを感じていたのですが、今度は文部省へ行くはめになった。文部省のほうで英語指導の人材を探していました。私は、何かと英語でスピーチをしていたから、目立ってはいました。ただ、希望する方も多かったので無理だろうと思っていたのですが、他の人たちが足の引っ張り合いをしているうちに、結局私に決まった。でも、嫌でしたね。役所っていう所は本当に融通がきかない。なにかにつけ、「決まっているからダメ」と言われる。ずいぶん反発しましたよ。

私は昭和60（1985）年に文部省に入省したのですが、その年に、後に神田外語大学の初代学長となる小川芳男先生に出会いました。小川先生を座長とする「英語教育改善協議会」というものがあり、何年も前からやっていたのですが、ちょうど私が入った年に答申を出すことになっていた。私は、教科調査官として協議会の答申づくりに参加しました。

（4/10）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

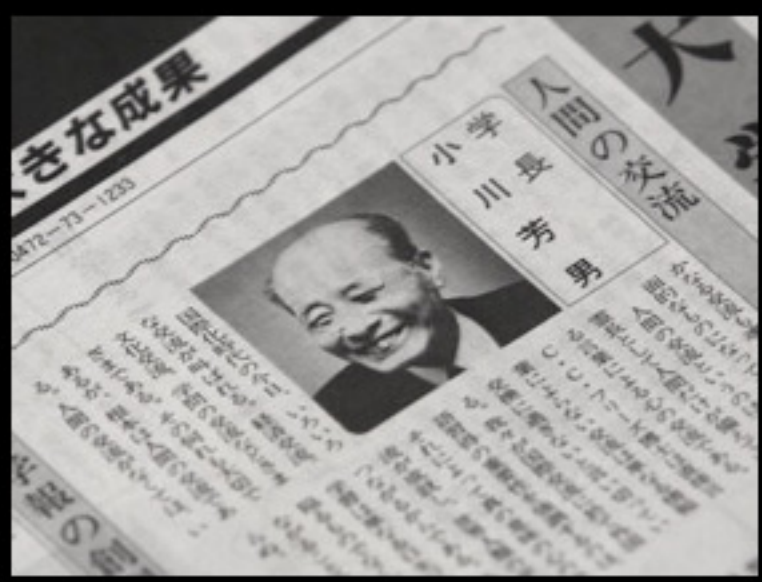
～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

この人が教授にならなくて、いったい、誰が教授になるのですか？

もちろん、文部省でお会いする以前から、小川芳男先生は存じあげていました。著書もずいぶんと読んでいました。でも、実際にお会いしたのは協議会が初めてでした。不思議なことで、小川先生も私に興味を持たれたようです。私が講演をすると小川先生が足を運んでくれる。私はすべて英語で講演をしましたから、小川先生も興味を持ってくれたのでしょうね。

そして、昭和60（1985）年に神田外語大学の設立が文部省から承認されて、小川先生から参加の要請をいただいたんです。私が文部省を定年退職する年の昭和62（1987）年に大学が開学することになりました。私は4技能による総合的な英語指導を提唱し、小川先生も同じ考えを持っていらっしゃった。だから、小川先生はご自分が学長をされる神田外語大学には、私が適任だと思ったのではないでしょうか。

私自身も、定年退職を控えて、どうするかを考えていました。文部省の教科調査官は大学の先生になる方が多い。それと高校の校長ですね。どうしようか考えているときに、小川先生から誘っていただきました。大学では、教員を養成する教科教育ができます。そこで指導ができれば、私が文部省で関わってきた学習指導要領を具体的に展開する英語教員を養成できる。それを体験してみたかった。私には渡りに船の大チャンスだったというわけです。



大学の設立にあたっては、「大学設置準備委員会」が組織されます。その会合のなかで誰を教授にするかを話し合うんですね。小川先生が私を教授として推挙してくれましたが、大学教育での経験がないから、相当揉めたらしいです。しかし、小川先生が「この人が教授にならないで、一体誰が教授になるのですか？」と強く推してくれたので教授になることができました。

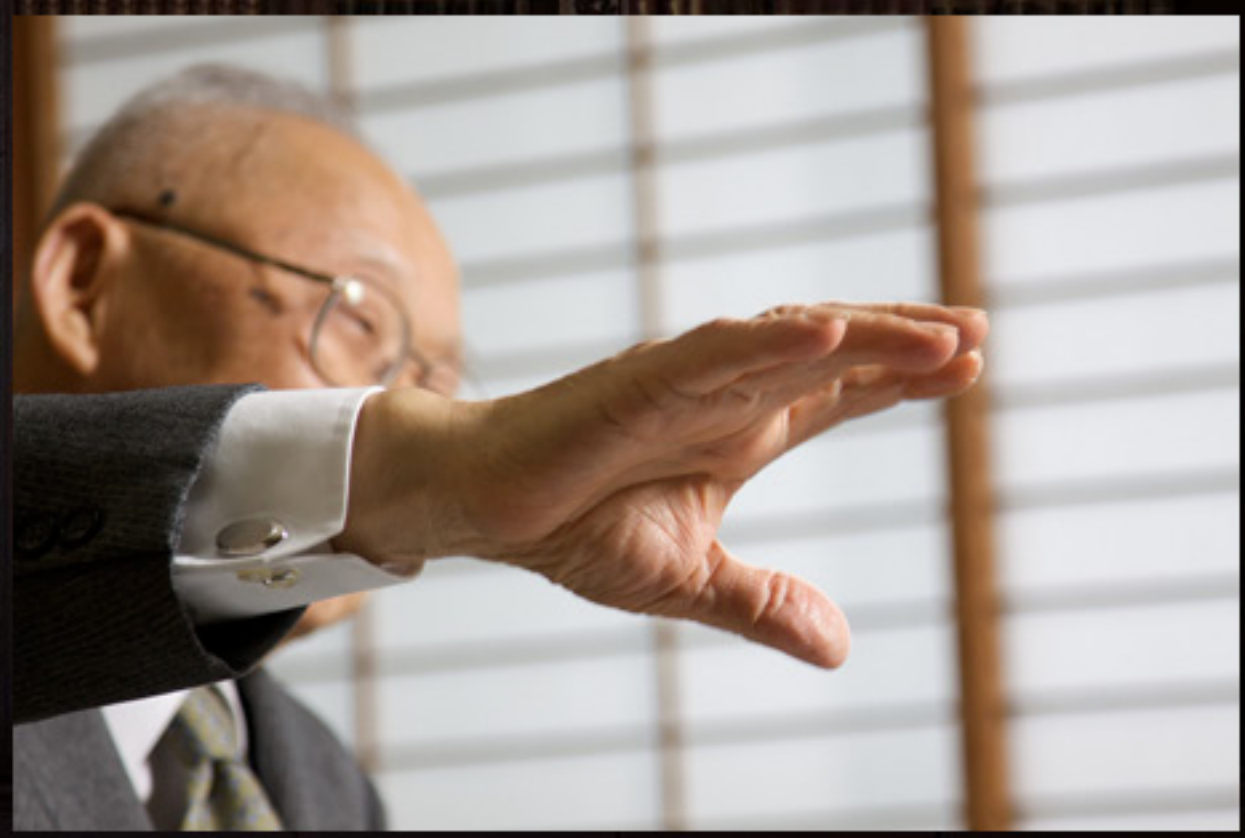
正式に教授として就任することが決定したのは開学の1年前です。昭和61（1986）年ですね。私はまだ文部省で働いていたから、とても忙しくて、当時、教務部次長だった山本和男先生とカリキュラムの相談をしなければならないのに、なかなか会えなかった。「先生、明日はどこへお出かけですか」と聞かれ、私が筑波に出張することを伝えると、山本先生はカリキュラムの打ち合わせのために、朝の上野駅までわざわざ来てくれたことを記憶していますね。（5/10）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～



英語指導で時事問題を取り上げなければ神田には入れない、という主張があった。

大学開学の前年の大仕事のひとつは入試問題の作成です。小川先生が入試作成のために招集したのは、異文化コミュニケーション研究所所長の古田暁先生、英米語学科の久泉鶴雄先生と原岡笙子先生、そして私です。久泉先生と原岡先生は教育大学の出身だから総合的に英語を教える視点をお持ちだったし、古田先生は異文化理解の視点や総合的な教育の視点を持っていました。そして私は、文部省で4技能による総合的な英語指導を推進してきた。ですから、参加したメンバーは小川先生の考える「総合的な英語学習」についての方向性を共有していたと思います。

このメンバーによって作成した英語の試験問題の大きな特徴のひとつは、90分の英語の試験問題の中で、30分をリスニングの問題に充てたことです。これだけ長い時間をリスニングに充てたのは全国の大学でも初めてでした。

それと読解問題でも内容を重視しました。私は文部省時代に学習指導要領に関わっていましたが、「いくら話すことができても、話す内容がなければ意味がない」と主張してきました。話す内容を培うこと、つまりある考え方を作り出す力は読むことによって育まれます。ですから、入試試験でも時事問題を多く取り入れました。これは、他の大学とは違う。多くの大学では文学作品から文章を引用することが多かった。極端に言えば、「高校の英語指導で時事問題を取り上げなければ、神田外語には入れないぞ」という主張があった。読解問題でも総合的な英語指導への主張を反映していったのです。

あとは面接ですね。これも小川先生の信念によるものでした。ずいぶんと反対もあったんですよ。面接は行うのが大変な割には、合格・不合格にはあまり影響が出ない。ですが、小川先生には強い意思がありました。「面接をやるということは、受験生がその自覚を持って来ているはずです。勉強だけでなく、人間性や物事の考え方、人柄も大切であることを受験生が意識することが大切です」とおっしゃっていました。私も大賛成でした。確かに10分ぐらいの面接で、人間性が分かるはずはありません。でも、受験生もきっと準備しているし、そのことそのものが大切なんです。

その後も私は入試委員会のメンバーを続けました。小川先生からは「佐々木さん、とにかく入試を改革してください」と言われてきましたからね。（6/10）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

小川先生の考えを一つずつ実現しながら かつてない外大の教育システムを整えた

神田外語大学は総合的な指導と少人数制という特徴がありました。人数が少なければ何か話さなければならない。外国語を話すことを学ぶうえでは大切な条件です。教室の椅子の数も限られていて、それ以上の学生は入れない。だから、講堂以外に大きな教室はありませんでした。

全国英語研究会のような大きな集まりをすると、分科会をする場所がなくて困りましたね。教室が狭くて、先生方が入りきれない。それぐらい徹底していました。それも当時は画期的でしたね。

教室の机の配置も従来の全員が教壇に向かうかたちではなく、馬のひづめのような馬蹄形にしました。半円形とも言いますね。これであれば他の学生の顔も見えて、活発な議論が生まれます。それと授業の長さも45分にしました。通常、大学の講義は90分ですが、小川先生はそれでは長過ぎるとおっしゃっていました。人間の緊張感は45分が限界だそうです。

総合的な英語指導、リスニングや時事問題、面接に力を入れた入試、そして少人数制で45分の授業。私たちは小川先生の考えを一つひとつ実現しながら、かつてない外国語学校のシステムを整えていきました。

小川先生は東京外国語大学の学長も経験された方です。神田外語大学の学長としては、今まで描いてきた理想の形をすべて実践するという意気込みをお持ちでした。大きな希望を持っていたのでしょうね。

大学が始まった当初、私は一般課程の英語を教えていました。「インテンシブ・リーディング」という科目です。授業では、読んで一語一語を訳すのではなく、文章を読ませて何が書いているかを要約させるのです。学生たちもやっているうちに慣れて、授業中に書いてあることを要約して英語で表現することができるようになってきました。

でも、こちらは大変ですよ。定期試験をすると、学生一人ひとりによって答えが異なるので、すべてきちんと英語を読んで採点しなければならないんですから。単なるマルバツの採点のほうのがずっと楽ですからね。（7/10）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

教育実習の指導案はすべて英語。校長に採用を言い渡された学生もいた。

開学から3年目以降は、教員になることを目指す学生を指導する教職課程の英語を担当しました。「英語科教育法」です。授業では、学生たち自身に授業をさせました。前期では基本的なことを講義し、後期は授業をさせる。絶対に日本語は使わないというルールを設けました。指導案もすべて英語で書かせました。学生たちも、「こんなにやりがいのある授業はない」って、非常に乗ってきましたね。マクドナルドをテーマにした授業をやったときは、店舗に行ってカップをもらってきました。とても充実した授業でした。

教職課程の学生たちは、2週間の教育実習に行きます。実習生は指導案を書きます。私はすべて英語で書くよう指導していました。授業でも年間に10回ぐらい指導案を書かせるのですが、すべて英語で書かせました。指導案を英語で書くことで、授業を英語で行うことの基礎もできますからね。

実習から戻った学生に実習日誌を見せてもらうと、実習先の高校の指導教官のなかには、「英語で指導案を書かれては分からない。なぜ日本語で書かないのか？」というコメントを書く方もいました。私は内心、「これは成功したな！」と思いましたよ。一方、学生からは「先生は日本語で書くことは教えてくれませんでした」と抗議されましたが、まぁ、翻訳すればよいだけですから。

もうひとつ心がけたのは視聴覚教育ですね。必ずOHPを使って授業をやるよう指導しました。ところが、教育実習で高校へ行くと、OHPがないと言われる。ないわけは、ないんですよ。なぜなら、私が文部省にいたとき、視聴覚教育を推進する一環として、すべての高校でOHPを教材として購入する費用を予算として確保し、各県に割り当てたのですから。たいていの場合、物置にしまってありましたね。文部省や県が色々と考えて予算を確保しても、教育現場では使えきれていないということですね。

教育実習先の学校で「君は、採用！」と校長先生に言われた学生もいました。これだけの実習ができるのであれば、教師として充分に通用するという評価です。もちろん、学生は教員採用試験に受からなければなりませんが、合格者の名簿に載れば、その校長先生が指名してくれるというわけです。私も驚きましたが、同時に、学生たちへの指導が評価されたと感じました。（8/10）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

私も外国人とはよく議論をした。
話が決着すれば、すっかり仲良くなる。

平成2（1990）年7月、小川先生がお亡くなりになり、後任の学長には井上和子先生が就任されました。井上先生は、私と瓜谷良平先生を学長補佐として指名されました。指名の理由のひとつは、私が学校教育関係の規則に詳しかったからです。確かに文部省にいると意識しなくても規則には詳しくなりますから。学習指導要領にしても、自分が高校で教えていたときは全然気にしていませんでしたが、文部省での仕事をするとやはり詳しくなりました。

学長補佐をやっていたので委員はたくさん兼任しました。入試委員会、国際交流委員会、学務審議会、そして教職課程委員会です。退任する前には、自己点検委員会も始まりました。毎年4月の辞令公布式で、当時理事長だった、佐野隆治会長にお会いするのですが、「佐々木先生、こんなに兼任されて大変ですね」と声をかけていただきました。本当に大変だったんですよ（笑）。

井上先生は、ある学科が同じ方向を向いてくれないことで、とても苦労されていました。式典での国歌斉唱でもずいぶんと揉めました。私は学長補佐だから、そういう話し合いの場に出て、自分の立場から意見を言わせていただいた。その学科のすべての先生が反抗的な考えを持っていたわけではありません。学科のトップの先生方の考え方です。だから、あまりそういう考えを持たないその学科の先生方からはずいぶんと相談を受けました。

そもそも人と人は、考え方が合わなくて当たり前です。日本人と外国人ならなおさらです。私も外国人とはよく議論をした。さんざん話して、ときには「お前なんか辞めちまえ」と言われて、こちらも「お前こそ辞めろ」と言いましたね。でも、話が決着すれば、すっかり仲良くなる。しこりも残らない。今でも、当時そうやって議論した先生方から年賀状が来ますよ。

井上先生は、大学院の設立に力を入れました。私は、大学院設立にあたっての法律的なことを調べました。大学院が始まると、英語教育学を担当しました。学生は現役の高校の先生が多かった。先生方は授業が終わってから大学に来ていました。自分のテーマを決めさせて、そのテーマで議論をしていく。色々な意見が生まれてくる。国際理解や異文化理解を背景に持ちながら、英語を総合的に学び、考え方を養成していく。高校で実際に教えている人たちが学んでいるから、密度の濃い学習になっていきました。（9/10）

Copyright © 2011 Kanda Gaigo Alumni Association (KGAA)
All rights reserved.

第7回 佐々木輝雄神田外語大学元教授

理想の英語教育を求めて

～神田外語とともに歩んできた人々の証言～

この大学の名前には「国際理解」という言葉が本来、入るべきなのです。

思い返せば、小川先生も、私も、日本の英語教育を変えたい、という点でつながっていたのでしょうね。そして私にしてみれば、国民学校の代用教員からスタートして、中学と高校で英語を教えて、県教育庁と文部省では英語教員の指導についての仕事をしてきた。そして大学では英語教員を目指す学生たちの指導に当たれたのだから、本当にやりたいことができた、ということはしみじみと感じています。

今、神田外語大学に携わっている人々に伝えることがあるとすれば、それは、建学の精神というのをもう一度思い出してほしい、ということです。小川芳男先生は、どのような理想を持ちながら神田外語大学を創ったのでしょうか。

神田外語大学の英語の呼称は"Kanda University of International Studies"です。なぜ、"International Studies"という言葉が入っているのでしょう。大学設立を申請したとき、当時の文部省は日本語名に「国際理解」という言葉が入るのを好みませんでした。前例がなかったからです。本来は「国際理解」という言葉が入るべき大学なんです。その建学の精神だけは忘れてほしくないですね。

そして、人と人の絆を大切にしてください。自分がよき後輩となり、先輩になることです。仕事では先輩を大切にしながら学び、後輩を育てることです。そうすれば人を理解する力が生まれていきます。神田外語大学は、人と人の絆を大切にしながら、国際理解を学ぶ場であってほしいですね。（10/10）

佐々木 輝雄（ささき てるお）

大正15（1926）年、アメリカ・ニューヨーク州に生まれる。昭和8（1933）年に帰国。昭和24（1949）年、東京高等師範学校卒業後、千葉県内の中学や高校で教鞭を執った後、昭和45（1970）年に千葉県教育庁指導課指導主事に。昭和50（1975年）年、文部省に入省し、初等中等教育局で英語教育の指導法に関する改革にあたる。昭和62（1987）年、文部省を主任視学官を最後に定年退職し、同年に開学した神田外語大学の教授に就任。学長補佐、大学院教授、言語教育研究所所長なども歴任した。平成9（1997）年に退職したが、その後も平成12（2000）年までは特遇教授や非常勤講師として学生の指導にあたる。現在は、千葉県長生郡陸沢町で農業を営んでいる。

撮影協力：九十九里浜 一宮館